

風雪の11月、燕岳。でも景色は最高！

西 正子

●2017年11月24日(金)夜～26日(日)

●メンバー 西A 斎藤整 白井 西M

9月に燕岳へ行った時、ふと思いついた。「初冬の時期も、すばらしいのではないか」と。

元会員、宮口さんの報告をはじめ、ネットで調べてみても、11月の中下旬、合戦小屋から上が雪らしい。サクサクと稜線に登り、天気に恵まれれば、うっすらと雪化粧したアルプスの眺め。なんと良いプランだろう。

そして、毎日アルペン号最終日「11月24日夜出発・26日帰京」の便を予約したのは、秋も盛りの10月半ばだった。整紀さんと白井さんも参加となり、メンバーは4人に増えている。

しかし・・・。

11月に入ると、この数年なかったような寒波が何度も押し寄せてきた。こんな本格的な雪山登山になるとは、夢にも思っていなかったのだ。ほんとうに・・・。

冬の神様は、サービス精神が旺盛らしい。「雪は、少し多くらいが楽しいね」の思いに応えて、山盛りいっぱい用意してくれたのだ。

25日 小雪・夕方晴れ 強風

中房温泉(7:15)→合戦小屋(11:05~15)→燕山荘(13:00)

バスのチェーントラブルの影響で、予定よりやや遅い出発となる。空は暗くないが、雪がちらちら舞っている。

中房温泉(1450m)から、雪道歩きがはじまった。たくさんの登山者に踏まれ、白い道は凍りつき、第一ベンチの休憩で、早くもアイゼンを取り出した。

相変わらずのジグザグ急登だが、最初からヤックを着いていても、ちょうど良いくらいだ。空気は

冷えわたっている。それでも、あたりを見渡せば、前日の雪で、木々の枝は真っ白な綿帽子をかぶり、とても美しい。

第二ベンチで20cm、第三ベンチで40cm。どんどん雪の量がふえてくる。おまけに大風だ。富士見ベンチまで登ると、樹林のすき間から、時折すごい風が吹き込んでくる。ゴーッとうなる声を聞くだけで、気持ちがなえてしまう。

そんな中でも元気なのは白井さん。寒風をものともせず、半分凍った水筒の水をあたりまえのように飲んでいた。

4時間弱で、合戦小屋に到着する。ストーブが焚かれ、とても暖かい。カップ麺なども購入でき、まさにオアシスのような場所だった。たくさんの人が休憩し、稜線にむかう準備をし、そして情報交換に余念がない。

私たちも小屋前で、目出し帽やオーバー手袋などを着け、吹きさらしの尾根に出る覚悟を整えた。

ワカンに関しては、朗報が得られた。燕山荘までは、数メートルおきに竹竿が立つが、その右側にトレースがあり、うまく外さないように登れば、大丈夫だというのだ。なんでも、小屋の人達が毎日ラッセルを繰り返し、登山者のために、もぐらない道を作りあげたということだった。

燕山荘のHPを見て、ほとんどの登山者と同様、ワカンを持参した私たちだが、浮力はあるものの、体力を消耗するこの道具は、極力使いたくない、というのが本音だった。まったく燕山荘の好意には、ただただ感謝するばかりだ。

2350mの森林限界を越えると、雪は1m。ルートは完全な冬道で、空に向かって一直線に伸びている。あたり一面、白、白、白一色の世界。小鳥のさえずりも、可憐なお花畠もない。夏の輝きなど想像もできない、ほんとうの冬山が待っていた。

雪はやんだが、強風が雪煙を呼び、一瞬前が見

えなくなる。風の呼吸を読みながら、一步一步前進する。いつのまにか他のグループも合わせ、一列になって登っていた。

「もうじき小屋ですよ」下山者の声を聞いてから約20分、燕山荘(2704m)に到着した。行動時間は約6時間で、思ったより早かったのでほっとした。

小屋の中は天国だ。部屋は暖かく、濡れ物もすぐ乾く。装備を解いた後は、食堂でゆったりと山荘ライフを楽しんだ。見ると、後から後から登山者がやってくる。気がつくと、泊り客は100人以上に増えていた。

15時を過ぎると、天候が回復し、最初に燕岳(2762.9m)が、ついで槍・穂高が、峻烈な姿を現した。とたんに歓声が上がる。カメラを手に、みんな外に飛び出した。あわてているから、足は小屋のつっかけだ。

整紀さんも、寒空の下、たくさんの写真を撮っていた。アルプスの新雪登山は初めてだから、感動もひとしおだと思う。

小屋じまいの日ということで、夕食後、オーナーの赤沼健至氏の挨拶があったが、参加はかなわなかった。昼の風雪には耐えられたが、夜の睡魔には耐えることができなかつたのだ。ただ、氏の奏でるアルペンホルンの演奏が、小屋に渡るのは聞くことができた。内気な穏やかな音色だった。冬の訪れと、長い山の眠りを象徴するような、おごそかな響きだった。

こうして内容の濃い1日が終わった。

26日 晴れ・強風

燕山荘(6:45)→燕岳往復→燕山荘(8:15)→合戦小屋(9:30)→中房温泉(11:20)

翌日は天候が回復した。やや雲が多いが、アルプス連山の真っ白な姿が、荘厳に感じる。

朝食後、ストックをピッケルに持ち替え、山頂へと向かう。ちょうど日の出の時間と重なり、太陽が昇ると、目指す燕岳がバラ色に染まり、とてもきれいだ。

しかし今日もまた、強風はやまない。何度も体を持っていかれそうになるが、慎重にゆっくり進む。地面が露出する所を通過する時は、花崗岩の石粒が飛び散り、とても痛かった。

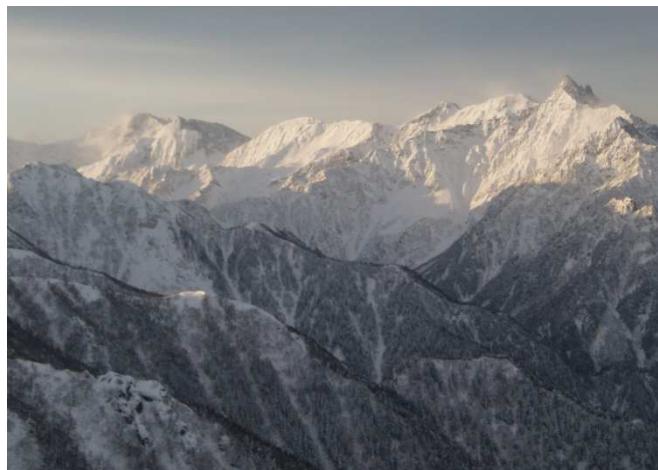
こうした状況、山頂は長居する場所ではなかった。記念写真を撮ると早々に下山した。

帰りは、頂上にむかうたくさんの人とすれ違つた。若い人が多く、本格的なカメラを抱えている人もいる。でなければ、スマホだ。

往復で約1時間半。小屋に戻ってきた。

合戦尾根に入り、標高を下げると、やっと暖かくなってきた。視界もよくなり、下山の気楽さも手伝ってか、何度も振り返っては、雄大な山々を見渡した。

合戦小屋、富士見ベンチ、第三ベンチ、第二ベンチ、第一ベンチ・・・どんどん下る。眼下に川と小さな屋根が見えたら、中房温泉はあつという間だった。



帰りの合戦尾根